
<外伝> 五男？……四男じゃなかったっけ？

杉花粉撲滅委員

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

< 外伝 > 五男? …… 四男じゃなかったっけ?

【Nコード】

N5482Y

【作者名】

杉花粉撲滅委員

【あらすじ】

普通の現代人が、戦国時代に飛ばされました。転生先は周りに流され、主体が無い武将・織田（津田）源三郎勝長。コヤツの行動によってどんなイレギュラーが生じるかは作者も判りません。

1：本作は外伝です。

2：本作品をご覧になる際は、先に本編をご一読願います。

第一話 日ノ本惣無事ノ紆余曲折ノ（前書き）

とりあえず、本編の最終話の後日談的なものを書いてみました。

第一話 日ノ本惣無事ノ紆余曲折

天正13年（1585年） 1月

数日前に織田家での年賀の挨拶が行なわれた。全国の諸大名が一斉に集まったので端はたから見ていて壮大という言葉が相応しかった。

そして今日は甲斐・府中にて武田家としての年賀の儀が行なわれる。但し、今年は少し赴きが異なる。

まず、織田家から勝長様が参席された。皆ソワソワしている。以前と言っても僕は物心がついていなかったが、まだ御坊丸と呼ばれていた時は武田家の虜囚・人質として見下していた人達が今では勝長様に頭が上がらないから見ていて可笑しい。

そして通年と違う事がもう一つ、何でかしら無いけど僕、木曾義春が随行しているのだ。

織田家の人質が実家（？）に戻って良いのかなあとも思ったけど、勝長様曰く、

「俺が一緒だから良いの。それに松姫様の了解は得ている」ということらしい。

そんな訳で信勝様からの新年の挨拶も終わり、宴の席に様変わりした訳だけど相変わらず周りはソワソワしている。

そんな中でどつしりと落ち着いて横に座っているか勝長様を見ると無性にふてぶてしさを感ずってしまう。

そうこうしていると、上座の方から勝頼様が勝長様に近寄り、話し掛けてきた。

「勝長殿、今年も織田と仲良くしていきたい、御台様（松姫様の事）

は御壮健かな？」

「左様ですね、御台様も先日催された織田の新年の席で上様と仲睦まじくされておりましたよ」

うーん、大人（僕ももう元服しているから大人に分類されるんだけど）って何で形式に拘るんだろう？ 何か勝頼様から“奥歯にモノが挟まった”感じが漂ってるんだよなあ。

「さて、本日勝長殿が参られた訳をお聞きしたいのだが？」

「え〜とですね」

成程、これが聞きたかったのか！ 何か周りの武田家家臣団も二人の会話を固唾を吞んで窺っている。皆聞きたかったら、素直に聞けばいいのに。

それに対して勝長様は何か周りをキョロキョロと見て、誰かを探しているような、誰かが居ない事を確かめているような……。

「久しぶりに信勝殿の顔を見たかったと言うのもあるのですが……、ああ居た居た！、源三郎、……じゃなくて信幸、ヤツに用があって此度は甲斐まで参ったのです」

「信幸に？」

酒宴の末席の方に居た信幸さんを指しながら勝長様が答えると、周りが一斉に信幸さんに目を向けた。

すると信幸さんが此方に近づいてきて勝長様に問い掛けた。

「俺に何の用ですか、勝長様？（信幸心の声：お主が織田に戻ってからは、貴様に迷惑は掛けていないぞ）」

「うん、用があったから来たんだけどね（勝長心の声：俺は用は無い。俺のカミさんが用があったんだ！）」

「して、その用というのは？（信幸心の声：あの怒らすと怖い茶々殿が？）」

「実は……信幸に側室をもうけては如何かと。信幸も凜殿と一緒になって結構経つけど一向に子が出来ないうつです（勝長心の声：

俺が言ってるんじゃないからね」

「……………」

何か、そう勝長様と信幸さんの間で目に見えない耳に届かない何か
が飛び交っていた。

そうこうしていると、廊下の方からドドドドドつという音が聞こえ
てきて、“普段は美人さんだが、今は般若”のような人が現れた。

「勝長様、お久しゅう。信幸の奥の凜に御座います」

「あつ………… ああ、凜殿、駿河以来ですね、御壮健でしたか？」

「ええ、夫共々仲良くやっております」

「………… 左様ですか」

「後、茶々様に御言付けを。『夫・信幸はいざ知らず、凜に側室は
要りません』と」

今日、僕は何か大人の世界に一步踏み入れた気がした。一騎当千の
武田家家臣団（男連中）が一言も発せず、当の勝長様と信幸さんも
たじたじだった。

今月の格言『触らぬ神に祟り無し、他人の恋路を邪魔するな！』

天正15年（1587年） 2月

今日から俺の名前は『蘆名主計頭義広』だ。“今日から”というの
は今日、隣国の蘆名左京亮盛隆殿の娘（養女）を娶り、蘆名家へ婿
入りするからだ。

正直な俺の気持ちは“蘆名など滅んでしまえ”だ。大体先代の盛隆
殿にしても二階堂家からの人質だったのが知らんうちに16代当主
だった盛氏の養子となって、現在第18代当主に納まっているのだ

から。

それにそもそも俺は8年前に白河結城氏13代当主の白河左衛門佐義親の養子に入っていたはずだぞ。そんなにポンポンと家を変えな
いでくれ。

大体俺は養母（義親の室で蘆名盛氏の娘）から色々聞かされていて、
蘆名の悪評は知っているんだ。あのクソ婆めえ、自分の実家の事な
のに余計な事を吹き込みやがって、今からゲンナリするじゃないか！

蘆名の悪評……、それはおぞましい家中争いだ。一門家臣のクセに
権勢を振るう猪苗代氏、金上氏、小田切氏、新宮氏。現当主の盛隆
殿が二階堂家からの当主になってからは目も当てられないようにな
った。

誰も当主の言う事を聞かないのだ。

なんで、佐竹を蛇蝎の如く嫌っている伊達の隣国なんかに移らない
といけないんだ！俺は婆あのお陰で知ってるんだぞ、既に伊達と
影で手を結んでいる蘆名家臣が居る事を！これじゃあオチオチ安
眠出来ないじゃないか！

そもそもなんで上杉は、そして織田は蘆名家を改易してくれなかつ
たんだ！そうしてくれていれば俺は佐竹家の次男坊として悠々自
適の生活が遅れたんだ！恨んでも恨みきれん。

今日、蘆名へ婿入りする前にウチの“鬼瓦のようなムサイ親父・佐
竹常陸介義重”が俺に言ってきた。

「嫁御の顔は三日で慣れる」

つて。……知ってただよ、こっちは！婆あ情報を舐めんな、坂東
太郎！あのブスの婆あ血縁だぞ、美人のはずが無いじゃないか！

俺は親父に言っちゃった、“何で俺なんだ！弟の忠次郎（後の貞

隆)や彦太郎(後の宣家)でも良いじゃないか”って。

そしたら親父はなんていったと思う。シラツと

「あ奴らはダメじゃ、だって岩城家や多賀谷家に送り込む予定じゃから」

と言い放ちやがった。子供を何だと思ってるんだ！ 鞆丸から出た時点でもうテメエのモンじゃねえんだよ、こつちは！

そもそも親父は間違えている。遠い縁者の伊達植宗・晴宗親子のように嫡男以外の子供を他家へ送り出して縁戚外交をしようとしている様だが、そもそも伊達から嫁(俺にとつての母)を貰っておきながら相変わらず伊達といがみ合っている時点で外交下手なんだ。いい加減気付けよ！

ああ〜もう、支離滅裂だがこんな事なら織田に人質に行きたい！

織田の勝長様なら俺の気持ちも判ってくれるはずだ！

あの人は俺より10歳年長だが、今の俺と同じ境遇で過ごした後に綺麗なカミさんを二人も囲っている。羨ましい限りだ！

それに織田家に人質になった者達は全員勝長様の計らいで綺麗な女の子と結ばれている。まったくもって羨ましい限りだ！

なんかこの世の総てに絶望してきた、いっそ出家してしまいたい。

今からでも遅くありませんから勝長様、俺を織田家への人質に指名して下さい。

天正18年(1590年) 1月

今日、我が甥にして次期毛利家当主の宮松丸が元服して毛利甲斐守秀元と名を改めた。

わざわざ織田から勝長様が参列して頂けた。勝長様曰く

「宮松丸……ゴホン、秀元は我が子も同じ故。それに門司の海の幸は格別と隆景殿に文で何度も言われていたので一度食してみたかった」

との事だ。

嬉しい事を言ってくれる。俺、毛利内記秀包のこれまでの人生でこんな嬉しい日は無い。

俺の人生を一言で言えば“他人の道具”だ。

永禄10年（1567年）に毛利陸奥守元就の九男として生まれて、暫くして文亀2年（1571年）に大田氏の後継となり、天正7年（1579年）に母が小早川氏の庶流・乃美氏の出身であるという縁もあつて兄の小早川隆景の養子となり、織田家に帰順してからは宮松丸の傳役として大坂に常駐してきた。

常に他人に振り回されてきた人生と言っても良い。

しかし今日俺は、元服に伴い宮松丸……ゴホン、秀元様と共に毛利の地・長門に戻る事が許され、これまでの働きから小早川性から毛利性への名乗りを許された。なんとも目出度過ぎて恐ろしくなる。

元服の儀が滞りなく終わり、酒宴となると勝長様が横に座って俺に酒を勧めてきた。

「秀包殿、ささ、まずは御一献」

「これは忝い（かたじけない）」

「宮松丸……ゴホン、どうも癖が抜けぬなあ。ゴホン、秀元は昔から聡明であつた故、今後の毛利は安泰でござるな」

「勝長様の元で過ごさせて頂いたお陰で御座います」

「いやいや、俺のウチに来る前から賢かったよ、だって来て早々に浅野の長満（ちようまん 後の幸長）、前田の孫四郎（後の利政）、津田の庄九郎（後の昌澄）、柴田の権六郎（後の勝重）、細川の熊千代（後の忠隆）、堀の吉千代（後の親良）を出し抜いておりましたから」

「はははっ、それがしもよく出し抜かれておりました」

お互い酒を酌み交わしながら話していると兄であり、かつての養父でもある小早川家当主・小早川隆景が輪に加わってきた。

「この度は遠路遙々おいで頂き有り難く存じます」

「おお隆景殿、酒の席で上下の別は無しとしましょう」

「左様ですか、それではそうしましょう」

和気藹々（あいあい）といった時間が過ぎていくと、勝長様が神妙な顔になり俺達兄弟に語りかけてきた。

「隆景殿、そして秀包殿」

「何で御座ろう」

「兄君・吉川駿河守元春が亡くなったは毛利にとって大きな損失」

「……」

「またお二方の伯父君である興元殿は酒によって命を削られた由」

「……」

「これからの毛利にお二方は欠かす事の出来ぬ故、余り暴飲暴食は控えられた方が宜しいかと。これからも秀元を助けてやって下され」

「「ははっ」」

何度でも言おう、これまでの人生でこんな嬉しい日は無い、と。

第二話 筑前の胃痛〜同工異曲〜（前書き）

最初に申し上げて起きます。

一見チートにも見えませんが、他者（この時代の『賢者』）との協議結果を述べているだけです。

それでもチートが嫌いな人はブラウザーバックしましょう

第二話 筑前の胃痛〜同工異曲〜

天正13年（1585年） 3月

俺は兄・信忠殿から『内密に來い』と大坂の城に呼ばれた。

そして評定の間に通されてみると、そこには羽柴秀吉と明智光秀の二人が既に座っていた。

「これは勝長様。貴殿も上様に呼ばれた口ですか？」

「左様」

「何を聞かれる事やら、貴殿はご存知かな？」

「否、『内密に』とお達ししか承っております」

むむっ、この秀吉が何か探りを入れてくる感じがして癪に障る。あゝ判った、俺ってコイツが嫌いなんだなと実感した。

“はあ、早く上様来ないかなあ”なんて感じで秀吉を無視している
と……。

ダンっ！ダンっ！ダンっ！……ドカツ！（いい加減聞き慣れた足音を奏でながら上様、登場）

「明智、羽柴、源三郎（俺の事）、よう参った！」

「ははっ」「ははっ」
上座に座った上様が機嫌良く話しかけてくる。……どうやら悪い話では無いようだ。

「話というのも他でもない。全国の仕置きについてじゃ。織田家の知恵者三人の意見を聞きたい」

「はあ」

冗談でしょ？ それにしてもなんで“全国の仕置き”について内密に話さんといかんの？

「上様」

「何じゃ、源三郎」

「それがし達が意見を申す前に一つ伺いたい事があります」

「何じゃ」

「何故に此度『内密に』とそれがし達を召されたのですか」

「それは……面倒だったのじゃ」

「はあ？」

「……つまり、ゴホン、諸将の前で話せば必ず喧々諤々の評定となり、更に好き勝手な事を言う馬鹿が出てくる。それを質するのが面倒だったのじゃ」

何て身も蓋もない……、喧々諤々は当たり前、それを纏めるのが貴方のお仕事でしょうが！

イカンイカン、此処は怒りを納めてっと。

「よう判りました。して、まずは上様のお考えをお聞かせ下さい」

「左様、上様の御心を踏まえねば此方も策を立てれませぬ」

秀吉も俺に便乗して上様の考えを聞こうとする。うーん、秀吉の手の上で転がされている感があるなあ、此処は気を引き締めて掛かるう。

「儂の考えか、……儂は全国の諸大名に銭を使わせた。下手に懐が豊かになるとまたぞろ戦を考える馬鹿が出ぬとも限らぬ故な」

「左様ですか、うーんそれではまずは年長の明智殿の策を聞きましよう」

何んだ？ 俺に意見を求められて『主導権を握られた』って嫌な顔

を一瞬したな、秀吉。お前の好きにはさせませんよ。

「そうですね、まず城を築かれては如何でしょう。全国諸大名に手伝い普請をさせるのです」

「……ふむ」

うーん、上様も良い案かもって考えてるよ。

確かに築城には金が掛かるし、築いた後の運用やら何やらでも結構金を使うから悪い案ではない。

でもね、ダメなの。俺が嫌なのよ、築城したあとの守備兵とかの無駄が。だってアイツ等ただの“タダ飯食らい”じゃん！ と言う事でこの案は却下です。

「それがしは反対です。折角戦が無くなったにも関わらず、ここで城を造っては逆効果にござる。これでは全国の諸大名に『織田は諸大名を恐れているから城を築かせて自身だけ守ろうとしている』と思われるもおかしくありません」

「ふむ、勝長の言も一理有るな。……筑前はどうじゃ、何か良い策はあるか？」

「ふむ、それがしは茶器の類を買わせる事を提案いたします」

「どういう事じゃ？」

あつ、上様が食い付いてきた。そう思った俺と同じ事を感じたのだろう、秀吉がこれ幸いとばかりに持論を展開し始めた。

「茶器は元々ただの土塊つちくれでございますれば、作成に掛かる費用はタダも同然。なれば売り手のボロ儲けにございますれば、当家で茶器を作成してそれを商人を介して諸大名に買わせれば、当家の懐が潤い諸大名も欲しい茶器が手に入りますれば両者に損はございませぬ」

「成程」

うーん、この案が採用されてしまう。この案も俺嫌い！ 此処は断

固反論して叩きのめすのみ！

「筑前殿、それがしはその策には反対だ」

「むむつ、勝長様！ 何故にございますか？」

「第一に確かに諸大名は散財するが、織田家を始め一部の者しか潤わぬ」

「ぐぐぐつ」

「第二に余りに大量の茶器を作成しては茶器そのものの価値が下がる。それでは真面目に漆器や陶磁器を製造している職人達の生活がままならなくなるは明白！」

「第三に大量に製造することになれば、職人が多くなりますがその中にはまだまだ未熟な者も現れます。となれば茶器そのものの品質が問われることになる。それでは折角南蛮人や朝鮮、明にも売れるようになったものも、直ぐに見向きもされなくなる」

「第四に……」

「もう宜しいっ！ それでは勝長様は何か良い策がござるのか！」

あつ、秀吉が怒り出した、まあ満を持して展開した持論がコテンパンにされたらおこりたくもなるわなあ。でもこれじゃあ赤くなつた猿と言われても仕様が無い。

さて俺の考えを述べるとするか。まあ“俺の”と言うのは語弊があるな。俺が預かっている人質の傅役を中継して全国の“出来る人”……小早川隆景殿や鍋島直茂殿、武藤昌幸殿、直江兼続たちと文通している訳だが、彼等と語り合った内容『ソナ事モアロウカト・戦国版』を披露するでしょう。

俺がただ子守りをしていただけの男だと思つなよ、爺いども！

「有り申す。まず街道と港に御座います」

「……」

「全国の主要な街道と港を整備し拡張させます」

おおつ、三人とも???つて顔してるな。これはちゃんと説明せねばいけないですね。

「街道と港が整備されれば物の流通が活発になり商いをする者が喜び、また多くの物が消費されれば物を作る者が喜びます」

「……しかし、それでは税が多くなって逆に諸大名の懐が潤うのではないか？」

あつ良い所に気付きましたね、上様。でも俺の策はこれだけでは無いのでござる。

「街道と港が整備は一度行なえば良いという訳では御座いません。

わだち轍の補修や湾岸の土砂撤去などといったその後の保守整備もござりますし、山賊や海賊といった輩の排除に兵を出さねばならず銭が掛かります。勿論それだけではございませぬ、今度は治水工事をさせます」

「……」

「治水が行き届けば洪水で苦しむ農夫が減ります。そしてその逆に田畑からの収穫が安定して来る事でしょう」

「……待て待て、それでは年貢が増えてしまいこれまた諸大名の懐が潤うのではないか？」

またまた良い所に気付きましたね、でも俺の策はまだあるのでござる。

「次に人を育てます。隠居された方や仏僧を講師に招き、次代の育成を図ります」

「……」

おおつ、今度は三人が渋い顔になった。何か御意見がお有りのようですね、聞きましょうか。

「此処までで何かご意見は？」

「勝長様、一つ伺いたい。隠居された者や僧共を使うのは良いのですが、それがどのように諸大名の懐を寒からしめるのでござるか？」

あまり金は必要無いように思うのですが」

ふむ、良い所に着目しましたね、光秀さん。うん、それをこれから説明しようと思っていたので丁度良いご質問です。

「ふふふつ、何も武士の童だけを対象にして言っている訳ではござらぬ。商人や農民、漁民の総ての民の童を対象にすれば良いのです」
「なにい」

「その数多い童達に字の読み書きを教える為に、一体何枚の紙と何本の筆が必要になることか、クククつ」

「しかし、そんな事を諸大名が認めるのか？」

「認めると思いますよ。上様が『全国の諸事を担える優秀な人材が必要じゃ』って号令すれば」

「……」

「ああっそれと一つ、童の教師となる仏僧ですが、寺の持ち田を一定以内に規制する代わりに、教える童の数だけ大名が報奨金を出させることもお勧めします」

「……」

上様と光秀は呆然とし、秀吉は苦虫を噛み締めている。まあそうだろう、この日ノ本でも裕福な羽柴家だからな。精々散財して上様の覚え目出度くするんだな、クククつ。

それにしても三人とも黙っているけど、何とか言えよ！

暫くして俺の案が諸大名の前で発布された。

勿論、諸大名達は一時の散財よりもその後の税が増える事を期待して余り異論を唱えなかったし、童達への教育についても自身の家臣育成だけでなく家臣を織田家に送り込ませられると考えたようであるほど問題は起きなかった。

いや、俺ばかり子守してたからな、皆にもこの『楽しさ』を味わって貰わなくてはな。

第三話 摂津の海原と和魂洋才

天正13年（1585年） 6月

俺は兄・信忠殿から『内密に來い』と大坂の城に呼ばれた。

そっういえば最近はお親父様の真似して大坂城の觀覽（有料）を始めやがった、この守銭奴め！

ダンッダンッダンッ！……ドカツ！ （最近親父様に似てきた足音を奏でながら上様、ご登場）

「よう来た、源三郎」

「はっ」

「早速だが、またそなたの力を借りたい」

「……はあ」

挨拶もそこそこに本題に入ろうとする所まで先代に似なくても良いのに……、やっぱり偉大な先代の跡を継ぐのも大変なのね。その辺りは認めてあげよう。

それにしても“力を貸せつて一体なんだろう？”と考えていると、おもむろに途方も無い話を始めた。

「当家というかこの日ノ本で“海軍”を作ろうと思う」

「海軍ですか……これまで諸家が擁してきた水軍とは異なるのですか？」

俺は海の事はよく分らん。

「うむ、全国の港が整備され始めてきたが倭寇やら海賊やらが跋扈しておつてな、諸大名では埒が明かぬ故に広域での取り締まりをせざるを得ぬ」

「成程……、海賊を成敗しようとしても直ぐに海域の外に逃げられてしまえば手の打ちようがありませんね。確かにこのままでは明や朝鮮、呂宋との貿易に支障がでますね」

「うん海賊か、無法者は懲らしめないといかんよな。この時代あまり保険とかがまだ確立されていないから海賊にあつたら商人は大損だもんな。」

「であろう！ まあ明は国が荒れているらしい故にままならぬが、朝鮮の李王朝と呂宋とは商いを盛んにしたい。なればそなたに海軍の設立を申し付ける」

「は？」

「何を鳩が豆鉄砲を喰らったような声を出しておる！ 海軍を作つて海賊を退治するのじゃ」

「うん、否とは申しませぬが……やはり“餅は餅屋”と申します故、それがではなく海の仕置きに長けた者を用いるのが良策ではないでしょうか？」

「なればそなたがその者達を使えば良かろう！」

「うわっ、なんつう強引な展開！ それに上様、“話は以上じゃ”と言わんばかりに席を立てて奥に逃げやがったよ。」

「うん、海軍作れって面倒臭いな。そもそも今までの水軍を一纏めにしただけで良いんじゃないの？」

天正13年（1585年） 7月

話が壮大過ぎて俺一人の手に負えないので、水軍を擁する家に相談する事にした。最近は何ノ本が統一されて“敵”がいなくなつて暇そうにしているらしいので、話を持ち掛けたら結構好評だった。とりあえず一声掛けたら志摩の九鬼水軍、毛利配下の村上水軍、伊

予の越智氏、三浦半島の三浦氏、津軽の安東水軍、若狭湾・山陰沖を拠点とする丹後水軍、播磨灘に居を構える塩飽水軍、松浦配下の五島水軍などの諸氏が大阪に来てくれた。

「ゴホン、此度上様より“海軍を作れ”との下知を頂きました」

「“海軍”でございますか？」

「うわあ、九鬼嘉隆が目を爛々とさせて食いついてきた。きっと“また戦が出来る”って思っているに違いない、こう言った戦好きは人の話を聞かないから面倒なんだよね。」

「左様、其処で皆さん全国に名を馳せた水軍を統一する事と相成りました」

「統一でございますか」

「あつ、村上武吉が嫌そうな顔しながら確認してきた。きっと“ウチの縄張りが侵される”って思っているに違いない……後々は実際そうするんだけどね。」

「まずは船舶の統一になるが、これまでの小早や関船、安宅船、鉄甲船のような手漕ぎ船ではなく、南蛮の者達が用いている帆船はんせんとする」

「勝長様、この日ノ本に南蛮人たちが乗っているような大型の帆船を建造できる船大工はおりませぬが……」

「南蛮人の乗る船も木製じゃ。設計図さえあれば既存の船大工にも造れよう。船大工が足りぬのであれば宮大工たちも用いる所存じゃ」

「はあ、してその設計図は如何なっておりますようか」

「それについては堺や博多にある南蛮人から取り寄せる事となっております。ついでに“羅針盤”という長期の航海に便利な代物も買付けます」

「成程」

不安そうだった安東実季と松浦鎮信が筆問してくるが、予め聞いて

くるだろうと予想していたので直ぐに答えられた。何時の時代も予習は大切ですね。

「なお、造船に掛かる費用と海軍の運営費は総て織田家を始め諸大名と諸豪商にて賄う。それ故今後は当家の指示に従ってもらう、良いな」

「ははっ」

天正15年（1587年） 4月

はあ、何とか様になってきたな。ここまでするまで長かったな。

当初は各家で航海術は異なるし、帆船の扱い方も無知だったし、何かと既得権益を守ろうと抵抗する諸大名が“余計なお節介”をしてきたりと大変だった。

“海軍操練所”を作るだけで事足りる訳もなく、時には海兵達を叱咤激励したり、またある時には航海術の統一にむけて指揮官となる者たちと日夜を越えて討論したり、莫大な諸経費をやりくりしてみたり、話の分からない馬鹿な諸大名に“拳の挨拶”をしたり、“自分の縄張りが”と五月蠅いバカ水軍をドザ衛門にしたり……ゴホン、と色々ありました。

はあ、管理・運営・支援・折衝ってやつですね、最近になって上様の苦勞が分かってきた。

心の中でボロクソ言っただけでスイマセンでした。

それに流石にここ二年余り海に出る事が多くなつた所為で茶々や督を“放置状態”にしていたので、今から埋め合わせを考えるとゲンナリしてしまう。

話は戻るが、海賊討伐に用いる武器も作成した。それまでの火矢と大筒をやめて、焙烙火矢や西洋諸国の鑄造技術を取り入れて製造した大砲に変えた。この辺りは我が悪友の信之の弟で先頃元服した信繁が色々と案を出してくれた。ヤツはこういった新しいモノを作るのが好きらしい。

また製造には堺や国友村、更に飛驒の鍛冶職人が大いに頑張ってくれた。職人の皆さん有難う御座いました。

ここまで莫大な金銭（主に技術提供に渋る南蛮人に渡した金銭）が費やされたが、織田家は勿論の事だが諸大名や諸豪商にも『海上保安税』として相応の銭を出させるようにした。

尤もこれからも同程度の費用が掛かるが、諸大名に金銭を使わせた織田家としては断る理由がない。

そんな訳で俺は今、博多を出て玄界灘を航海中なのである。ちなみに隣には先頃元服した大道寺直次が居る。コイツの母親が“後北条家家臣の遠山家”の出であるため、俺にとっては遠い遠い親戚（但し血は繋がっていない）となる訳だ。

元服して暇そうにしていた直次を“悪の道”ならぬ大人の世界に連れ込んで二年。俺が遠山の縁者と知ってか、妙に懐いてくるので俺も満更でもないのだが、チョツと間が抜けているので時々引き締めが必要なヤツだ。

「面舵三十！ 十間先の海賊に向けて大砲三連用意！ 撃てッ」

ドーン！ ドーン！ ドーン！

「お頭、敵船に二発着弾を確認！ あつ、敵船の沈没を確認しました」

「バカ者、お頭”じゃない！ “船長”だ何回言えば覚えるん

だ！」

「ひく、すいません」

「よし、当船はこのまま商船の護衛をしながら琉球に向かう」

「はっ、はい！」

俺は海賊の頭目じゃない！ 頼むから“お頭”なんて呼ぶんじゃない、何度言わせるんだ全く！

天正15年（1587年） 8月

ダンっ！ダンっ！ダンっ！……ドカツ！（いい加減行儀良く登場しろよ、上様！）

「源三郎、見事っ」

「ははっ」

そう、今日は日ノ本海軍の活動報告を兼ねて大坂城に来ているんだが、目の前の上様がやけにニタニタしている。

「源三郎、海軍の働きにより海賊被害も激減したようだ」

「はっ」

「此度の働きに対して褒美を遣わす。まず海軍全員に対して銀二十枚を与える」

「ははっ（皆頑張ったもんね、これ位の褒美は貰ってもバチは当たらないだろう）」

「そなたには慰労金として金三十枚を与える」

「はっ、有り難き幸せ（多分、茶々や督へのご機嫌伺いで消えてなくなるなあ）」

「また、まず海軍操練所所長の任を解く。後任には松浦鎮信とする、良いな」

「はっ（五島水軍を率いる松浦殿なら安心だね）」

「更にそなたには以前と同様に諸大名からの質の面倒に加えて、我が次男の吉丸の傳役を命じる」

「ははっ（やっと本来の職に戻るかあ）」

ふう〜、やっと海から開放された。これが何よりの褒美だよ、全く。お肌や髪が荒れちゃって大変だったからね、早くおウチに帰って督愛用の塗り薬を塗って貰おうと……って俺いつになったら隠居できるんだらう？

第四話 大和の感慨く奇々怪々

天正14年（1586年） 2月

俺が織田家に戻ってから7年、天下が平定されて1年、いろんな事があつた。

でも一番は『織田家もそうだけど全国には変わったヤツがいるもんだ』ということだ。ただ猪突猛進なだけの森長可なんて可愛いものだ。

まず始めに蒲生飛騨守氏郷だ。

コイツはウチの親父に見込まれて俺の姉ーちゃん（冬姫の事）を娶っているわけだから義理の兄になるのだが、真面目な話は沢山ある。茶湯にも深い理解があつて利休七哲の一人（筆頭）にまで数えられたり、「蒲生家では戦場に常に鯰尾の銀兜が先頭にある」という逸話が語られるほど大将としては珍しく自ら陣頭に立つて槍を奮ったり、月に一度家臣を全員集めて自らの屋敷で会議を行い会議後には氏郷自らが風呂を沸かしたり、料理を振舞ったり……逸話に欠かない御仁である。

が、しかしこの男はおかしい。何がおかしいかと言うと自分が気に入った家臣に蒲生姓を下賜乱発し、蒲生家中に本来稀少なるべき同名衆を大量生産しているのだ。

だから蒲生家に行つて

「お〜い、蒲生殿お！」

なんて呼ぼうものなら、家中一斉に振り向かれるのである。全く持つて面倒臭い事この上ない。

先日、『何故に多くの家臣に蒲生姓を与えるのか』と聞いてみたのだが、答えを聞いて唾然とした。
氏郷曰く「切支丹では万人は皆家族です。だから家臣は皆兄弟家族です！ 私の家臣、皆家族です」
と言い切りやがった。……南蛮人は皆同じ名前なんだろうか？

そういえば先日、前田利家に

「ええい、紛らわしいのじゃ！ これ以降は蒲生姓の下賜を禁止せよ！」

つて公衆の面前で鉄拳込みで怒られてたな、本人は涙目だった。

次の『変人』は立花飛騨守宗茂だ。

コイツも普段は常に温厚で誠実に人に接し、義理堅く正直な面など『武士の中の武士。彼こそがサムライ』とも呼ばれてたり、茶道においては細川忠興からも一目置かれていたり、香道では後陽成天皇の弟・良恕法親王より「？物」を贈られたり、蹴鞠は飛鳥井雅春から「鞠道」の門弟として「紫組之冠懸」を免許されていたり、九州での戦いでは島津から最後まで城を守ったり、……これまた逸話に欠かない傑物であるのだが。

この男は兎に角我慢強いのである。

なんでも幼少の頃、養父・立花道雪の供と一緒に近くの山を散歩中に棘の付いた栗を足で踏み痛みを訴えたら、家臣の由布惟信が駆けつけて抜く所か逆に栗を足に押し付けたいらしい。更に叫び声を上げようにも近くの駕籠の中からは養父の道雪が眉を吊上げて見ており、泣く事を許されなかつたらしい。何つースパルタ教育だ。

『三つ子の魂百まで』とは言うが、幼少からそんなに厳しく教育されたら仕様が無い。

でも『痛いときは痛い、嫌なものは嫌!』って素直に言った方が、家臣も主君の顔色を伺い易くて良いと思うの、僕ちゃん。

おまけにこの男、名前をコロコロと代えやがる。統虎、戸次統虎、立花鎮虎、宗虎、正成、親成、尚政、政高、俊正、経正、信正、宗茂。

幼名や別名、官位などを含めると幾つ呼び名があるんだよ、全く!

この前も

「こんにちは、鎮虎殿」

って普通に挨拶したら、

「拙者、この度『宗虎』と改名させて頂きました」

って言われちゃった。その後も会う人ごとに『その名前はもう古い、今の流行は宗虎です』って言い改めていたな。なんか途中から面倒臭そうだった……。

それにしても蒲生といい立花といい『飛驒守』って官位は変人御用達なんだろうか？ 少なくとも俺は付けたくない!

そして最後は何と言っても諏訪部定勝だろう。

織田家から見れば陪臣となるこの男、後北条氏の家臣で氏邦に属し、日尾城主を務めていたのだが……酒癖が悪いのである。まあ悪いといっても周りに暴れ散らしたりといった所まではいかないのだが……。

コイツの逸話なんだが、敵の侵攻を防いだ後の祝いの宴で大好きな酒をしこたま飲みすぎて二日酔い。まさにその時、定勝の居城へ敵

勢が寄せてきたのである。

本来なら指揮不能のため城方の兵が浮き足立ち、もしかしたら敗戦……という事もあり得ただろう。

しかし、このカミさん・妙喜尼が強い、夫人が甲冑をつけて出陣したのだった。

夫人を先頭に薙刀を横たえ侍女たちが続き、夫人の指揮の下、城方の兵たちが押し寄せる敵勢を蹴散らす。

そここうしているうちに青い顔をした定勝が吐き気をこらえて現れ、敵にリバー^{ゲロ}ス攻撃じゃなかった、痛打を浴びせた。こんなことが二度三度ではなかったという。

俺も仕事放棄して茶々や督に全部任せたいな、……でもそうすると多分一生頭が上がらないだろうから、せめて『男の威厳』が守れるぐらいには働くでしょう。

まあ他にも大内義興、伊達植宗、武田信虎、北条氏綱、大内義隆、六角義賢、赤松政村と多くの大名武將に「左京大夫」の官位を乱発した後奈良天皇、華やかな茶会の席に室町幕府第十代將軍の足利義積から拝領したという古びた（というよりもボロボロの）羽織を着用してくる山名豊国、茶道に入れ込みすぎて領地運営を放棄していた事を上様に怒られた叔父の織田長益と兄の織田信雄など……

何時の世にも『困ったチャン』は居るものです、周りの苦勞を気にしない馬鹿はもう放置です、ハイ。

天正14年（1586年） 2月

変わったヤツは男だけだと思っていたが、女性でも『気の毒な人』
や『股に一物付いてるんじゃない？』って人がいる事が分かった。
男女差別は良くないので、気になった女性も紹介しておこう。

まずは伊達輝宗の正室で政宗の生母の義姫だ。

遠く聞こえてくるところによると『奥羽の鬼姫』などと呼ばれてい
るらしい。

全くもつて的を得た愛称といえるだろう。俺でもこの婆さんは頭が
吹っ飛んでいるとしか言いようが無い。

だって最上家と伊達家が対陣していると真ん中に輿に乗ったまま居
座ったのである。それも居座りは二ヶ月以上に渡ってだぞ。

(史実では天正十六年(1588)に発生した戦だが本作では無視)

何を考えているのやら……、戦で目が血走り気が立っているヤロー
共の中間地点に二ヶ月も居座るなんて前代未聞だ。

勿論輿と側用人のみがいるだけで簡易便所などあるわけも無く、両
軍の男達に用を足しているのを多数目撃されてしまう訳だから、両
軍の総大将(兄の義光と息子の政宗)は恥ずかしい事この上ない。

全く、お前は『女版・露出狂』か！ お前さんを家族に持つ最上義
光と伊達政宗は大名として面目丸潰れだぞ。

あゝそういうえば、次男の小次郎への偏愛するあまり、というか病で
右眼を失った嫡男の政宗を殺そうとしたらしい、……どんな親だ！
いくら醜くなったからって少しは心障の息子を可愛がつてやれよ！

次に妙林尼という婆さんだ。

この女傑の凄さは九州攻めの際に発揮された。

当時、鶴崎城（現 大分県大分市南鶴崎）の城主は吉岡鑑興の子・統増（甚橋）であったのだが、その統増は宗麟に従って臼杵城（現 大分県臼杵市大字臼杵（臼杵公園））に籠城していた。

そのため、島津勢からの城攻めに対して鶴崎城の指揮は母親であった妙林尼に委ねられていた。

しかし若い兵は統増が臼杵城へ連れて行ってしまったため、城内及び周辺には老人の家臣や農民、女や子供しかおらず、戦力的にも降伏するのが妥当な選択肢であった。

だが九州の女傑は異なる結論を弾き出した。なんと城を明け渡す事を由としなかった妙林尼は籠城を決意し、急いで農民に家から板や畳を持ち寄せると、それを材料に城の周りに砦を築き、また農民に鉄砲の使い方を教えるなどして決戦に備えたのである。

また周到に準備した落とし穴や鳴子の罠と鉄砲を巧みに使用した奇策に次々と嵌り、大苦戦。結局、妙林尼率いる吉岡軍は計16度に及ぶ島津軍の攻撃を退け、なおも籠城を続けたのである。

神様、この婆さんを何で男に産まれて来させなかつたんですか？

この人が男だったら間違いない九州統一してましたよ。

多分、日ノ本三英傑・女版は上野の妙印尼、武蔵の妙喜尼、そして豊後の妙林尼で決まりだろう！ 甲斐姫、稲姫、豪姫、？千代などは、まだまだ可愛いものだ！

……それにしてもこの三英傑の皆さんは『妙』が名前についてるけど……何か呪われてないか、この『妙』って一字。

まあ……戦国の世は日常からして生きるか死ぬかの瀬戸際だし、こ

ういった普通とは違う女性が現れてもおおしくないだろう。
ああ、俺と俺の家族が普通のマトモな一般人でホントに良かった
よ、ホント。

第四話 大和の感慨く奇々怪々く（後書き）

風邪気味で意識が朦朧としているの中で書いてしまったため、相変わらずの駄文でスイマセン。

皆さんも風邪にはお気をつけ下さい。

第五話 和泉の慶事と大慶至極

文禄3年（1594年） 3月

今日、ウチの熊姫が本多忠勝の嫡男・本多忠政のもとへ輿入れする。あの小さかった熊姫がもう17歳だ、俺も歳を取ったものだ実感する。

相手の忠政だが、熊姫より二つ年上の19歳。まだまだケツの青い若造だ。

まだ顔を見た事はないが『あの』本多忠勝の息子だから、親父に似てきつとムサイに違いない！ そんなムサイ男の腕の中に俺の可愛い熊姫が納まると思うと無性に腹が立ってきた。

「熊姫、相手の忠政が気に入らなかつたら何時でも帰ってきて良いのだぞ。何なら俺の全権力を駆使してこの婚儀を破談にしようか？」

「……御義父上様、まだ会ったことも無い方の悪口を言うのは如何なものかと。それにこの婚儀は織田本家と徳川家のたつての悲願と聞いております故、早々取りやめる訳には参りませぬ」

「しかしだなあ」

「姉様（登久姫）も遠い島津に嫁がれましたが、今も仲良うなされているとか」

「うん、だが……（グスン）」

「熊は大丈夫です。折角の門出に涙は禁物ですよ、御義父上様！」
なんて気丈で健気な子なんだろう、可愛すぎる！

そんな事を考えていると横に並んでいる督が俺をやんわりと諭してきた。

「さあさあ、殿、元気を出して下さいませ。何も徳川家とその家中

が鬼な訳ではございませぬ」

「それは……そうだろうけど……」

「さあ熊、貴女が当家に来てから茶々様と共に私は貴女の母親代わりとして接してきましたが、今日からは本多殿の御母堂が貴女の母です。しっかりと孝行するのですよ」

「はい、御義母上様。熊はこの家で育った事を誇りに、これからは『本多の熊』として励んで参ります」

女子ってなんでこんなに強いんだろう、父親ってダメだな。

そんな感傷に耽っていると、後ろから小さな息子達が熊姫に言葉を掛けた。

「義姉上、御壮健でお過ごし下さい」

「義姉上ええ、今度会うときにまたお話聞かせて下さい」

「うん、源三郎も源四郎も元気でね（グスン）」

ムムムつ、いくら息子とはいえ『俺の可愛い熊姫』を泣かすとは許さん！ 後でお尻ペンペンの刑だ！

文禄4年（1595年） 1月

「あゝ本日はお日柄も良く……じゃなかった、ゴホン、熊千代も吉千代もいつの間にかこんなに大きくなりおつて……」

「勝長様を始め、織田家中の皆々様のお陰にございます」

「左様、茶々様や督様に厳しくも暖かく育てて頂いたご恩は終生忘れませぬ」

……グスン、一人前な事を言うようになりやがって、コンチクショウ！

ちなみにコイツ等と共に育つた於義丸、千熊丸、長満ちよしまん、孫四郎、宮松丸、庄九郎、権六郎も、既にそれぞれ徳川、長宗我部、浅野、前田、毛利、津田、柴田の各家に戻り元服して織田の為、各家の為、そして日ノ本の為に働いている。

皆良い青年となり、次代の当主や家中重臣となるべく実家でも頑張っているみたいだ。

話は戻るが、何時からかウチで預かっている子の元服の儀を俺が烏帽子親になつて当家で行なうようになった。そして今日、ウチで預かっていた熊千代も吉千代が元服する。

「熊千代、本日より細川忠隆と名乗れ！」

「ははっ」

「吉千代、本日より堀親良と名乗れ！」

「はっ」

二人の父親や家臣重臣達も臨席しているのだが、皆『息子よ、立派だぞ！ 若様、御立派で御座います！』って感じで目を細めながらウンウンと頷いている。

毎回思うのだが、この時の『良い歳した大の大人のニヤけた髭面』を見ると、無性にドツキたくなる。

『子供達の面倒をずっと見させられて大変だったのは俺なんだぞ、いい時ばかり父親面するな』ってね。まあ、でも俺も感慨深いから多めに見てやるか。

さて改めて二人に言葉を掛けてやるか、毎度同じセリフだけどね。

「これから後は実家に戻り、日ノ本の為に働くべし」

「ははっ」

「二人とも壮健でな」

「はっ、勝長様もお体にお気をつけて下さいませ。そしてこれからも御指導御鞭撻の程宜しくお願いいたします」

ウンウン、二人とも大人の顔をしている、昨日までの童とは大違いだ。

それにしても俺ってあと何人の元服に立ち会えば良いんだろう？
毎年どこかの家から人質として来た童を引き取っているんだよね、俺。

文禄4年（1595年） 8月

今、俺は大坂城で上様と諸大名との会談の場に参席している。

ふっ、朝から夕刻まで諸大名から拳がってくる陳情をきいているだけでも大変だ。

時には『ウチの領内で取れた作物を献上したい』だとか『ウチには男子がいない為、甥っ子を継嗣として養子に迎えたいので許可が欲しい』とか色々です。

そんなこんなで『今日も一日お疲れさん』って具合に会談を終わらせようと思っているところに、吉川蔵人頭広家が何かを決意したって顔で現れた。

この男、先代吉川元春の三男ながら嫡男で長兄の元長が死去したため吉川氏の当主となったと記憶しているが、はて？ 何かがある。

「上様におかれましては酷暑にも関わりませず、お健やかに麗しゅうあらせられます、この広家、祝着に存じます」

「うむ、そなたも息災か？」

「ははっ」

「して今日は何用じゃ」

「はっ、実は我が娘の乙姫を上様の側室にして頂きたく参上させて
頂きました」

「……」

うっん、上様が渋い顔になった、まあ分からんでもない。一部の者
には有名な話だからな、吉川家の姫君は器量が余り宜しくないって
事は。

それに上様は未だに松姫様にゾツコンだから、他の女性には見向き
もしないんだよ。

「如何でござ」その儀はお待ち下さい」「

急に言葉を発した俺に皆の視線が集中する。

「広家殿の姫君ならそれがしに下さいますせ！」

「え……、しかし……」

「……」

口籠る広家、『急に何を言い出すんだ』って感じで呆然とする上様。

「広家殿の姫君であれば、ぜひともそれがしの側室に迎えたい！」

この場にそれがしが居合わせたのも何かの縁、大切に致しますゆえ
何卒！」

「むむっ、大切にするとはい誠にございますか」

「はい」

「……判りました。娘の事宜しくお願いいたします」

「はい」

まあこれで上様と広家の面子を守ることが出来たわけだし、織田と
毛利・吉川の主従関係もこれで安泰だ。

そんな訳で側室をもう一人貰う事になっちゃった。茶々と督に何て言おう、まあ『日頃の愛』で何とかするしかないだろう。

それにしてもグフフツツ、噂では乙姫は器量はパツとしないが才女と聞くから、きつと祖父・元春が陣中で書写したという太平記40巻を覚えている事だろう。

閨の中で膝枕して貰いながらあの『元春の太平記』を聞く特権を誰にも渡さなかった俺、誰か褒めてくれ！

第六話 備前の梟雄〜冠婚葬祭〜（前書き）

始めに謝っておきます。

本話は脈絡も無い駄文となっており、申し訳ございません。

第六話 備前の梟雄と冠婚葬祭

天正20年（1592年） 2月

戦国最後の梟雄・宇喜多直家が死んで今年でちょうど100年になる、早いものだ。

ただここで思うのは尼子経久、北条早雲、斎藤道三、松永久秀など他にも梟雄と呼ばれた謀将はいるが、謀将がすべて梟雄では無いという事だ。

毛利元就を始め、本多正信、最上義光、武藤昌幸、竹中重治、黒田如水、鍋島直茂、直江兼続然りだ。

では梟雄と謀将の違いは何だろう。そして梟雄とは何者なのだろう。残忍で強く荒々しい者を言うのだろうか。または悪者などの首領にいうのだろうか。

しかし戦国時代に悪行・悪名をとどろかせた戦国武将は数多い。代表としてウチの親父・織田信長がそうだ、しかし親父を『梟雄』と呼ぶ者はいないだろう。

尼子経久や北条早雲、斎藤道三のように一代で大名までのし上がった者もいる。毛利元就や鍋島直茂などは似たようなものだ。

では彼ら梟雄がすべからず謀略を駆使して、ただ残忍であったのだろうか。答えは否だ。

北条早雲は、というか北条家は直轄領で日本史上最も低いと言われる四公六民の税制をしき、民の暮らしを守った。

斎藤道三は、当時の美濃守護土岐氏が自分勝手な政策をとっていた

のを打開し、美濃を東海屈指の強国にした。

尼子経久は、家臣に対しては非常に気を使う優しい人物だったと聞き及んでいる。まあ恩賞や物で家臣との関係を保たなければならぬ、当時の尼子氏の基盤の弱さもあるのだろうか……。

松永久秀は……、確かに第13代將軍・足利義輝を永祿の変で殺害し東大寺大仏殿焼失の首謀者だが、連歌や茶道に長けた教養人であり、領国に善政を敷いた名君として地元の大和では云われている。

まったくもって判らん、『梟雄』って何なんだよ。今度兼続あたり
に文で聞いてみよう。

天正20年（1592年）12月

今年ももう少しで終わるなあ、そして多くの武将や著名人が世を去った。

14代將軍足利義栄の弟・足利義助。

戸沢氏第17代当主・戸沢盛重。

沼田小早川氏の庶流で乃美氏当主・乃美備前守宗勝。

越後上杉氏の重臣の色部修理大夫長実。

毛利元就の嫡男毛利隆元の傅役を務めた毛利家重臣・国司飛騨守元相。

毛利元就の娘を娶って毛利一門に名を連ねた穴戸安芸守隆家。

10年近く織田を苦しめた本願寺第11世・顕如。

北条家前当主氏政の三男で旧岩付城主・太田氏房。

島津家前当主貴久の三男で日置家の祖にあたる島津左衛門督歳久。

武田氏24将の一人として数えられた小幡上総介信貞。

狩野派の絵師で、狩野元信の三男・狩野松栄。

はあ……俺もいつかは彼等の末席に名を連ねる事になるのだが、出来れば病気などで苦しみながら死にたくない。卒中とか心筋梗塞なんかでポックリ死にたい……っていうのは欲張りすぎだろつか。

まあ戦の世は終結したし出来れば戦死する心配は無くなったわけだから、首を取られたり、果ては野晒しって死に方をしないでだけマシか。

文禄2年（1593年） 3月

今日は楽しいお雛様……じゃなくてこの度於義丸改め徳川秀康と我が義妹・お江が夫婦となる事になった。

史実では6つも歳下の秀忠と結婚するけど、こっちの方が歳も近い気が合うはずだ。

お江はもう二十歳になっており、少しトウが立っているが気にしない。少なくとも俺は気にしない！

それにしてもあの於義丸がもう嫁を貰う『お年頃』になったのか、何か感慨深いね。

今でも我が『可愛い可愛い登久姫』の入浴を覗こうとしてた事を思い出すと腹が立ってくるが、まあ昔の話だ。

あの当時は『末は馬鹿殿様が大物大名か』と想像していたが……まさか『家族以外で一番近い親族』となろうとは、夢にも思わなかつたよ。

だって今回の婚儀によって『督の弟の秀康』と『茶々の末妹のお江』が結ばれる訳だから、俺と2重の意味で義兄弟となるんだぞ、『あ

の於義丸』が……世も末だ。

そして今、俺は三河・岡崎城に織田家親族代表として二人の婚儀に出席しているんだけど、周りの目がスゴイ。

まあ判らんでもないか、前当主の家康を始め多くの徳川家臣を俺が殺したようなもんだもんね。

流石に婚儀の間は大丈夫だと思っけど、宴が終わって気が抜けているところに後ろから……って事もあるかもしれないので早々に織田領に引き上げるとしよう。

と、そんな事を考えていると上座から秀康が声を掛けてきた。

「勝長様、それがしとは2重の意味で義兄弟となったからには、これからは『義兄上様』とお呼びしても宜しいでしょうか？」

「……………」

この目出度い祝いの席に似合わぬ殺伐とした徳川家臣団のいるところで、よくそんな呑気な事をニコやかに言えるものだ。

きっと秀康は大物かただの『空気読めない馬鹿』か……、俺が引き取っていたときはそれ程馬鹿には思わなかったけど……、やっぱり大物って事にしておこうかな、癪だけど。

そんなこんなで俺が何も言い返せないでいると、上座脇に座っている平岩親吉と本多忠勝が諫言しだした。

「殿、織田家の親族家臣と徳川家当主では身分というものがございまず、軽々しく『義兄上』などともうされてはなりません」

「左様、いくら勝長殿のもとで暮らしていたからといって、今は徳川家の家長でございますゆえ、その辺りを重々御考慮下さいませ」

うん、この二人ってあの戦で手傷を負って逃げ延びた二人なんだ

よな。きつと討ち取られた奴等と同等かそれ以上に憎悪で腸が煮え返っているんだよな。
彼らの動きにも注意しておこう、特に後ろに回られないように気をつけよう。

そんな風に俺が警戒心を強めているとは知らず、秀康は二人の重臣に反論していた。

「そうは言うが、あの織田との戦は当家から吹っかけた戦であって、いくら負けたとはいえ恨みを持つのは筋違いというものぞ」

「しかし殿！」

「ええい、しかしも案山子も無いわ！ 大体三河武士が何年も前の負け戦を気にし続けているなど、恥ずかしい限り！ 顔を洗って出直して参れ！」

「……」

面目丸潰れの平岩親吉と本多忠勝は渋々といった感で席を立ち、ずっと俺を睨みながら婚儀の間から出て行った。

きつと『殿にしかられたのも何もかもお前の所為だ！ いつかぶつ殺してやる』って念じていたな、あの顔を見ると。

二人が去って場が白けたのに気付いたのか知らないが、改めて秀康が俺に問い掛けてきた。

「ゴホン、勝長様、先程の件ですが『義兄上様』とお呼びしても宜しいでしょうか？」

「……う、うん」

認めてやる……、秀康、お前は大物だよ、ある意味親父さん（家康の事）を超えたかも知れん。間違ってもただの馬鹿殿様じゃこの剣呑とした場で平然とはしてられん！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5482y/>

<外伝> 五男？.....四男じゃなかったっけ？

2011年12月24日09時30分発行